

第6回日本小児へそ研究会のご挨拶



このたび第6回日本小児へそ研究会をお世話させていただくことになり、大変光栄に存じております。同時にこの研究会に対する諸先輩、会員の皆様の熱い思いに、非常に重い責任を感じております。

第6回の研究会は慶應義塾大学一般・消化器外科 北川雄光教授が会頭で開催される第120回日本外科学会定期学術集会の中で2020年4月17日（金）夕方にパシフィコ横浜にて開催される予定になっております。

4億年～3億5000万年前のデボン紀末に、寒冷化や大気中の酸素含有量低下という地球環境の変化を生き抜くために、母体から胎盤・臍帯を経て胚・胎仔に対して酸素・栄養の供給を行う哺乳類が出現したと言われます。何げなく腹部に鎮座するへそですが、大げさに言えば、へそには壮大な地球の歴史が垣間見えます。こうして登場した臍帯と言う装置は発生の要であり、胎児異常や先天性疾患とも深い関わりを持っています。令和になって最初の研究会となる今回は、本研究会の将来的な発展性を期待して、そんな臍帯の発生に関わる話題から、へそに関する手術手技まで、従来よりもさらに広くへそや臍帯に関する話題を集めることが出来ればと考えております。また、研究会発足から5年を経過し、この研究会の根幹的な課題の一つであるへそヘルニアに対しても、新たな臨床経験や知見が集積しております。今回、それらを見直したワークショップを企画して、そこでコンセンサスが得られれば、へそヘルニアの治療に対する一つの指針を「横浜提言」のような形でまとめたいと考えております。

日本外科学会の定期学術集会の一環として本研究会が開催されるようになり、小児外科医のみならず多領域の外科の先生方も参加できる方向性が求められております。領域や世代の垣根を取り払った、気さくでかつ熱心な議論の場を用意できるようにしたいと考えておりますので、皆様、奮って演題のご参加をお願い致します。

令和元年7月

第6回日本小児へそ研究会 会長
慶應義塾大学 小児外科
黒田 達夫

黒田 達夫